慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松尾音次郎著 我国商工業之現在及将来
Sub Title	
Author	
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.4 (1914. 5) ,p.504(124)- 505(125)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140501-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

分配高を異にしてゐるがこの班田制度が破れて莊園が甚多くなる時に於いては莊司は則ち大化以前の田令に當るのだが莊司が其部民に對する關係になれば事實上の土地の支配者がまた其所有者となり、こゝに所有者間に爭を生じ武家の勃興を促す樣になれば腕力の必要が起り武士なる一種の階級制度は出來たにもせよ良民賤民の區別は漸々なくなる樣になつた。こゝに部民の多くは郎等關係となり。古の民族關係は新なる形の下に家の子としてあらはゝのである。

從來の研究は莊園なる文字に拘泥し、班田制度以後に莊園の起源を置くのは誤りである、寧ろ斑田制なる支那制度の輸入は無理であるから破壞せられ起つたのは莊園である。けれども莊園の性質から云へば其系統は當然大化革新以前の土地制についてゐる。莊園專門の學者に此點に注意がないのは我史界の現狀である。

批評と紹介

松尾音次郎著　我國商工業之現在及將來

大正三年一月東京北文館發兌
菊版五五二頁定價金貳圓

著者松尾音次郎氏は農商務省囑託技師にして多年我商工業の實情の取調に從事し頗る其趨勢に精通せり。氏は數年前官命を帶びて南洋諸邦を歷遊し其產業の狀態を調査し、歸朝後其報告書『南洋の產業及其富源』を公刊せしが、頗る好評を博し忽ち數版を重ねたり。

本書も亦氏が農商務省の命を奉じて我國に於ける企業集中の現狀を調査せる結果を公刊せるものに外ならず。著者は冒頭筆を歐米諸國に於ける企業集中の趨勢に起し、次で我國の纖維工業界、製紙業界、製糖業界、人造肥料業界、浮燈口金製造業界、麥酒醸造業界、燐寸工業界、麻絲紡績業界、石油界並に製絨業界に於て企業の集中若しくは聯合が漸次盛んならんとせるの狀態を細說し、進んで企業の合同又は聯合が現在及び將來に於ける企業上の危險不利益を矯正豫防せんとするに起因せるものなるの所以を說明せる後、更に轉じて企業集中の形式と企業聯合の種類とを擧げ、且つ生產、物價、貿易、社會、政治等に及ぼす企業集中の影響に論及し、最後に我國に於ける企業集中は未だ歐米の夫れに及ぼず從つて之を奬勵するを以て得策なりと斷じて種々の奬勵法を論述すると同時に、企業集中は動もすれば獨占の弊害を誘致するの傾向あるものなるを指摘し、之に對して國家の採る可き取締法を論じて卷を結べり。

以上は本書內容の梗概なるが、本書の特徵と看做す可きものは我國工業界に於ける企業の合同並に聯合に關する精密なる研究なりと謂つ可きか。著者は農商務省の藏せる豐富なる調査資料に基きて本書を起稿せるものなるを以て、記述例證の正確なるは推して知る可し。殊に本書は官省又は當事者と何等の緣故を有せざる者が其詳細を知ることを得ざる諸會社の聯合規約の條文等を載せ、以て讀者の參考に資する所尠からず。企業集中の理論的研究を載せたる良書は他になきに非ざれども、本書の如く企業集中の實狀を正確精密に叙說せるは蓋し他に其類を見ることを得ざるべきか。されば、吾人は斯くの如き企業集中研究の良參考書を得たるを慶賀し、本書が廣く江湖に行はるゝに至らんことを切望す。(T)

三上正毅譯　ユートピア

大正二年十二月東京聖牛書院發兌
小版三一〇頁定價七十五錢

本書はサー、トーマス、モーアSir Thomas more の名著『ユトピア』Utopiaの抄譯なり。原書はユトピア（ユトピアは希臘語にして『何處にも存在せず』との意義を有す）と名づくる一理想國に於ける幸福なる人民の生活狀態を描寫せるものにして、著者は之に依りて其當時（ヘンリー八世の時代）に於ける英國の舊守的社會生活を諷刺せんと試みたり。されど、モーアは本書を拉典語にて著述せしを以て、本書を繙く者は僅かに拉典語を解する少數の歐洲人此種の著述に趣味を有する者に過ぎざりき然りと雖も、モーアの死後ラルフ、ロビンソンなる者が之を英譯せし後、本書は漸く一般讀者の注意を惹くに至り、爾來社會主義を奉ずる者に取りて理想鄕の模範を示すものと看做されたり三上氏の抄譯せるは『ユトピア』の英譯なるが、之に對するモーリス、アダム氏の評論をも併せて譯出して、讀者の參考に供せり。卽ち邦譯書は之を分ちて三章となし、第一章評傳にアダム氏の評論を收め、第二章理想的國家の部に英譯書の第一卷を譯戰し第三章ユートピヤ見聞談の部に英譯書の第二卷を譯出せり。邦譯は間々英譯書の字句を省略せる所ありと雖も、原著者の論點を傳へて遺漏なきが如し。譯文明快流暢にして英譯書の文意を正確に飜述すると同時に、讀者をして其の譯文なるを忘却せしむるの趣きあり。吾人は本書が三上氏の筆に成る他の譯書と同じく廣く世に行はるゝに至る可きことを疑はず。(T)